



MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

看護医療学部 准教授 矢ヶ崎^{やがさき}香^{かおり}

がんで仕事をあきらめる前に

日本では、がんと診断される人の約3分の1は就労世代だと言われています。家庭や職場を支える重要な役割を担っている人たちです。

昨今では、がん医療の技術や薬剤の開発が進み、治療を受けながら仕事を続け、社会生活を営む人も増えていきます。しかし、がんと診断されたことによる辛さやがん治療の副作用の辛さなどによって、仕事を続けることが難しくなった人も少なくありません。

がんやその治療に伴う多様な症状は、日常生活に影響します。例えば、化学療法を受けていると薬剤によってはだるさを強く感じたり、嘔気、嘔吐、あるいは手足のしびれ等が出現して、普段の生活さえも思い通りにならず、心まで弱くな

ったように感じる場合があります。それにもかかわらず、家族や職場の人に症状を隠し、迷惑をかけないように無理をしすぎて疲れてしまうこともあります。仕事を続ける自信がなくなり、退職を選ぶ人も少なくないでしょう。

大事なことは、がん治療に伴う副作用症状は強く出やすい時期があっても、徐々に和らぎ、改善する時期もあるということを理解することです。事前に家族や職場の人にこのことを共有しておく、その状況を互いに受け入れやすくなります。逆に、周囲にがん治療を受けている人がいたら、あなたが症状の変化を認識しているだけでもその人は救われるでしょう。

日本は、がん患者の就労支援について

積極的に取り組みはじめています。がん診療連携拠点病院に指定されている施設は「がん相談支援センター（がんの相談窓口）」を設置し、通院している人だけでなく、院外の患者や家族の相談に、専門的なスキルを備えた看護師（専門看護師等）や医療ソーシャルワーカーなどが応じています。また、医療機関の中には専門看護師や認定看護師による看外来や、社会保険労務士による就労相談窓口を設置している施設も増えてきています。さまざまな問題を独りで抱えこまずに、こういった相談の場を積極的に活用することが困難を乗り越えうるうえで大きな助けになります。がんで仕事をあきらめる前に、ご自分の周りに相談できる場所があることを思い出してください。